

## ＜桂文珍 落語的見聞録＞サギと雁と木の枝



このところ実家の庭に木の枝がよく落ちています。

はて、周囲にそんな木は無いし、嵐が来たわけでもない。

何でかな？と空を見上げてわかった。

春先になるとサギが木の上に巣を作る。その巣作りのために嘴に小枝をくわえて飛んで来るのだが、大きい枝をくわえ過ぎてあごが疲れ、途中でポトリと落としているのだ。ナゾが解けた。

一方、世の中には驚くような詐欺事件がある。

ご存じ、大谷翔平選手の元通訳、水原一平容疑者が銀行詐欺容疑で訴追された。ギャンブル依存症で、ナ、ナント、賭けに1万9千回、勝ったのが218億円、負けたのが280億円、結果、62億円の負債。

それで大谷選手の口座から24億円以上を不正に送金したというのだ

から、ビックリもいいとこ。大谷選手は何も知らなかったし、被害者だとわかっていや実にホッとした。

一平容疑者サギはその口に大きなバットをくわえて、自分自身が司法の手にポトリ、と落ちたというわけだ。

でも本人はどこかでホッとしているかもしれない。これで依存症から抜け出すことができるかも…と。

一方の大谷選手はご承知のように大活躍。いい世話人、通訳に出会ってほしい。

まあ、いいパートナーもできたし大丈夫だろう。

落語「雁風呂（がんぶろ）」は、大阪の商人が貸した金を返してもらおう交渉の旅の途中、茶店に名人将監（しょうげん）・光信が描いた屏風（びょうぶ）があり、松に雁（がん、かりがね）が描かれている。松に鶴ならわかるがなぜ雁なのかと、老いた侍がお付きの者と商人に聞く。

遠い北の国から日本の青森外ヶ浜まで雁が小枝をくわえて飛んで来る途中、疲れて嘴から小枝を海の上にポトリと落とす。それにつかまって波の上で羽根を休め、また枝をくわえて飛び、浜に着いて松の木にとまり、枝を下に落とす。

春になるとまたその木をくわえて北の国に帰るが、木が残ったままに。この本数は日本で寿命を迎えてしまった雁の数。亡くなった雁を弔うのに、残った木を集め風呂を沸かして旅人に入ってもらおうという風習の絵です、と商人が言う。尋ねたのは水戸黄門様で商人は淀屋辰五郎の二代目。黄門様のおかげで三千両の集金ができた。

「雁風呂の話一つで三千両とは高い雁（かりがね）」

「そのはず貸金（かしがね）を取りに行くのじゃ」といい噺（はなし）。

サギの落とした枝で風呂沸かしたらどうなるやろ？

（かつら・ぶんちん＝落語家）

この春大谷選手が巻き込まれたびっくりする詐欺事件を話題に取り上げた話。

「詐欺」から「サギ」を思い浮かべ、文珍さんの実家では春先「サギ」が木の上に巣を作る時節になると、嘴に小枝をくわえて飛んで来る「サギ」が大きい枝をくわえ過ぎてあごが疲れ、途中で実家の庭にポトリと落して行く事があるという。そして、これによく似た話が江戸落語「雁風呂」にあるという。

「小枝を啜えて北から南へ海を渡ってきた雁が旅の途中 帰りのために落としていった小枝。

戻りが済んだ春先に集めて風呂を沸かして戻れなかった数多くの雁を供養する」という。

青森県津軽地方に伝わる「雁風呂」伝承を材料にして、「浜に着いて松の木に止り、枝を下に落とす雁の絵」を前に掛川宿で出会った水戸黄門と商人 淀屋辰五郎の二代目が 展開する落語。

インターネットで検索して六代目三遊亭 園生さんの落語で聞きました。

そういえば北大寮歌「都ぞ弥生」の歌詞にも「雁（かりがね）」がありましたね

今回もいろんなことが頭に浮かんで、毎回楽しみ。

ニコニコ 茶目っ気もある大谷さんにはみんなが好印象。現在の頑張り 期待一杯です

また、水原さんも立ち直ってほしいなあと。 2024.5.10. From Kobe Mutsu Nakanishi